

教育の基礎と実践の授業を受ける 音楽大学の学生の意識

南 泰代

Attitudes of music students taking lectures on basics and practice of education

1、研究の目的

音楽大学の学生がどのような意識を持ち、教職課程の授業を受けているのか、また理想とする教師像をどのように捉え目指しているのかを調査することにより、教育実習までにしっかりとした教育観を持つことを目的とする。また、教壇での発表やグループでの討議を経験することにより、社会で生きていくための知識や能力を備え、生きる力を養うことを目的とする。アクティブ・ラーニングの方法を授業に導入することが、学生の考え方を向上させ、自信につなげることを実証するものである。

2、先行研究

今井氏他の「教師論におけるアクティブ・ラーニングに関する研究」において国立教員養成系大学でのアクティブ・ラーニングの取組があまり進んでいない報告がある⁽¹⁾。私立ではさらに進んでいないのが現状である。そのため、音楽大学の教職課程でアクティブ・ラーニングの方法を授業に導入した。滝川氏他の「質問紙調査を通して見る大学生の音楽教育観ならびに音楽教師像」の質問項目を参考にして質問を作成した⁽²⁾。

3、研究方法

音楽大学の2学年中心の教職の授業を取っている学生65人に対してアクティブ・ラーニングの授業を行った。そして、授業の終わりに質問形式の用紙を配布し意識調査を行った。

4、質問結果

(1) 夢について

①「夢」について質問したところ、65人中「教師になりたい」が13人、「音楽関係に関わりたい」が25人、「自宅でのピアノの先生」が8人、「音楽療法士（教職の資格が必要）」が3人、未定を含めその他が16人であった。やはり、音楽大学なので音楽関係の仕事に就

きたい学生が多い。まだしっかりと進路が決まっていない学生も多いので、教職課程の資格を取れたら取っておこうというのが本音であろう。

②「もし教師になるのであれば何処の教師になりたいですか」について質問したところ、「大学の教授になりたい」が8人、「高等学校の教師になりたい」が28人、「中学校の教師になりたい」が20人、小学校や幼稚園等の先生を含めその他が9人であった。大学の教授になりたい学生が8人もいたことには驚いた。高等学校や中学校の音楽の教師になりたい学生が7割以上と多かった。しかし、高等学校では音楽は選択科目なので正規の教師の枠が少なく難しい。非常勤講師では家庭を持つだけの収入が得られないため、日本の大きな問題である少子化がさらに進むことになる。音楽大学の教師からいえば、音楽の科目が必修になることを切に望むものである。

(2) 教師について

③「理想の教師はどんな先生ですか」について質問したところ、「尊敬される先生になりたい」が9人、「信頼される先生になりたい」が22人、「生徒を一番にする先生になりたい」が12人、「好かれる先生になりたい」が11人、優しい先生や厳しい先生等その他が11人であった。生徒に信頼される先生が学生の理想教師ということになった。

④「非教師はどんな先生ですか」について質問したところ、「自己中心的な先生が嫌だった」が26人、「性格に問題のある先生が嫌だった」が28人、「生徒を差別して扱う先生が嫌だった」が11人であった。自己中心的で性格に問題がある先生が学生の非教師であった。

(表1) 夢と教師

	コース	ピアノ	演奏家	管楽	弦楽	打楽	作曲	ジャズ	映像音楽	音楽療法	音楽総合	音楽ビジネス	計
	計	14	6	24	2	6	1	1	1	3	6	1	65
夢	教師	5	1	4	1	1					1		13
	音楽関係	2	2	14		2	1	1	1		1	1	25
	ピアノ先生	6	1	1									8
	音楽療法士									3			3
	その他	1	2	5	1	3					4		16
何処の教師	大学教授	1	2	2		1		1	1				8
	高校教師	8	2	8	2	2	1			1	4		28
	中学教師	4	1	11		3				1			20
	その他	1	1	3						1	2	1	9
理想教師像	尊敬される	1	1	6		1							9
	信頼される	5	3	8	2	3				1			22
	生徒一番	3	1	3					1	1	2	1	12
	好かれる	4		3				1		1	2		11
	その他	1	1	4		2	1				2		11
非教師像	自己中心的	6	4	8		2			1	3	2		26
	性格に問題	3	2	11	2	4	1	1			3	1	28
	生徒を差別	5		5							1		11

(表2) 良い先生と嫌な先生

良い先生とは	嫌な先生とは
生徒を一番にしてくれる先生	差別的に扱う先生
優しいだけではない先生	決めつける先生
どんな生徒にもまっすぐ向き合える先生	生徒を否定する先生
最後まで耳を傾ける先生	最後まで耳を傾けない先生
生徒を愛する先生	生徒も見てない先生
思いやりのある先生	見下す先生
権力を振りかざす、生徒の目標に合わず先生	意見を押し付ける先生
人間味のある先生	怒鳴る先生
生徒の能力を引き出せる先生	冷たい先生
切り替えができる先生	ストレスをコントロールできない先生
悩みを理解してくれる先生	生徒の気持ちを考えない先生
生徒が寄ってくる先生	何も聞いてくれない先生
目標にされる先生	生徒を認めない
駄目なことは怒る先生	無駄に怒る先生
自分を捨てられる先生	自己中心的な先生
生徒を納得させられる力量のある先生	生徒の気持ち考えない先生
相談にのってくれる先生	生徒任せの先生
ひいきしない先生	ひいきする先生
生徒のSOSに気づいてくれる先生	生徒のSOSを無視する先生
生徒を比較しない先生	人によって変わる先生

(表3) 良い先生数と嫌な先生数

	コース	ピアノ	演奏家	管楽	弦楽	打楽	作曲	ジャズ	映像音楽	音楽療法	音楽総合	音楽ビジネス	計
	計	14	6	24	2	6	1	1	1	3	6	1	65
良い先生数	1人	1		1		1						1	4
	2人	2		4		1							7
	3人	2	1	4		1	1	1	1	2	1		14
	4人	2		5									7
	5人	3	4	4		1					2		14
	6人			2	1						2		5
	7人			1	1	2					1		5
	10人		1										1
	11人	1											1
	12人	1		1									2
	15人	1											1
	19人	1											1
20人									1			1	
多数			2										2
嫌な先生数	1人	4	2	5	1	2				1	3	1	19
	2人	2	1	3		1							7
	3人	3	1	3		1					1		9
	4人	2	1	3		1							7
	5人			3			1			1	1		6
	6人	2							1				3
	7人	1		1									2
	8人			1									1
	10人			3				1		1	1		6
	多数		1	2	1	1							5

⑤「良い先生とはどんな先生ですか」について質問したところ、自由記述では、「生徒を一番にしてくれる先生」「優しいだけではない先生」「どんな生徒にもまっすぐに向き合える先生」「最後まで耳を傾ける先生」「生徒を愛する先生」等が多かった。

⑥「嫌な先生とはどんな先生ですか」について質問したところ、自由記述では、「差別的に扱う先生」「決めつける先生」「生徒を否定する先生」等が多かった。

⑦「今までに良い先生には何人ぐらい巡り合いましたか」について質問したところ、多数は2人しかなかった。大学2年生といえは百人以上の先生と関わってきた年齢であるが、三人と五人が14人、二人と四人が7人、六人と七人が5人、一人が4人と多かった。20年間で自分が良い先生と感じた教師は片手で数える人数しかいないことがいえた。

⑧「今までに嫌な先生には何人ぐらい巡り合いましたか」について質問したところ、一人が19人と多かった。多数は5人であった。嫌な先生ばかりに巡り合うのは良い先生ばかりに巡り合うより多いことがいえた。

(3) 音楽について

⑨「音楽の場はどんな場と思いますか」について質問したところ、「みんな一緒に音楽を楽しむ場」が28人、「音楽の知識を得る場」が13人、「音楽に触れる場」が10人、「音楽を理解する場」が9人であった。音楽の場はみんな一緒に楽しむ場であるという学生の意識が高いことがいえた。

⑩「音楽の役割とは何でしょうか」について質問したところ、「協調性を育む」が12人、「音楽を楽しむ」が19人、「経験を広げる」が12人であった。音楽の役割も楽しむであった。

(表4) 音楽とは

	コース	ピアノ	演奏家	管楽	弦楽	打楽	作曲	ジャズ	映像音楽	音楽療法	音楽総合	音楽ビジネス	計
	計	14	6	24	2	6	1	1	1	3	6	1	65
音楽とは	みんな一緒に音楽する場	4	3	10	2	4					5		28
	音楽の知識を得る場	2	2	3		1				3	1	1	13
	音楽に触れる場	3		6		1							10
	音楽を理解する場	4	1	2			1	1					9
	音楽表現を身につける場	1		2									3
音楽の役割	協調性を育む	1	1	6	1	1					2		12
	音楽を楽しむ	6	1	3	1	2			1	2	2	1	19
	経験を広げる	2	2	6							2		12
	感性を磨く	2	2										4
	想像力を身につける			1		1	1	1					4
	表現の技術を身につける	1		1		1							3
	心を豊かにする			2						1			3
音楽を理解する	1		2									3	

(4) 学校について

⑪「学校とはどんな所ですか」について質問したところ、自由記述では、「尊重し合いながら学ぶ所」「個性を引き出してくれる所」「社会に出て困らないように学ぶ所」等が多かった。

(表5) 学校とは

学校とはどんな所
尊重し合いながら学ぶ所
個性を引き出してくれる所
社会に出て困らないように学ぶ所
正しく生きる方法を教えてもらう所
人間関係や役割を協力することを学ぶ所
自主的に学びたいことを学習する所
人間関係や役割を協力することを学ぶ所
お互い支え合い、競い合う、成長できる所
他人とのかかわりを学ぶ所
楽しく出会いがあり成長できる所
人生の基礎を学ぶ所
必要、不要なことを学ぶ所
切磋琢磨する所
社会性、協調性、忍耐力を身に着ける所
道徳を学び人間形成の場
コミュニケーションをとる所
社会に出て困らないように学ぶ所
上下関係を学ぶ所
善悪を学び、関わりを広げる所
対人関係を学ぶ所

(表6) 家庭とは

家庭とはどんな所
生活する所
安心できる所
温かい所
相談できる場
最後まで味方してくれる所
つらい時に帰りたいと思える所
互いに尊重しあう所
味方でいてくれる場所
欠点を認めてくれる所
素でいられる所
小さな社会
理由なく過ごせる所
生き方を学び生活する所
小さな調和が大切な所
家族の団欒の場
人間の基礎を学ぶ場
血縁関係の集まりの場
家族がいる場
信用できる所
安心して飲食できる所

(5) 家庭について

⑫「家庭とはどんな所ですか」について質問したところ、自由記述では、「生活する所」「安心できる所」「温かい所」「相談できる所」等が多かった。

⑬「いろんなことを相談する人は誰ですか」について質問したところ、友達が46人、母親が11人、先生が8人であった。学生にとって友達が一番であった。

(6) 人生について

⑭「生きるとは何ですか」について質問したところ、自由記述では、「どんな事が起きても貫く」「目標を持ち進むこと」「夢に向かって大切に生きる」等が多かった。

⑮「幸せとは何ですか」について質問したところ、自由記述では、「好きなことができる」「苦しみや逆境を超えた先」「認めてくれる家族や友人に恵まれる」等が多かった。

⑯「生きる苦しみとは何ですか」について質問したところ、自由記述では、「悪口やいじめを見ること」「生きる目標がない時」「やりたいことができない時」等が多かった。

⑰「嬉しい言葉とはどんな言葉ですか」について質問したところ、自由記述では、「あなたならできる」「頑張ったね」「笑顔がいいね」等が多かった。

(表7) 生きるとは

生きるとは
どんな事が起きてでも貫く
目標を持ち進むこと
夢に向かって大切に生きる
知識を増やすこと
目の前のことを一生懸命にする
寿命を全うすること
少しずつ積み重ねること
見聞を広める
心があること
成長するためにもがき考え生活する
思い出、感情を身に着けること
得られるものがあること
今を生きること
壁を乗り越えて幸せを見つける
孤独である
喜怒哀楽を全部出し切る
楽しく辛く悲しいことが起こる
幸せを追い求める
自立するため成長する
命を無駄にしなく生き抜くこと

(表8) 幸せとは

幸せとは
好きなことができる
苦しみや逆境を超えた先
認めてくれる家族や友人に恵まれる
努力が報われた時
自分のことを考えてくれる人がいること
暮らせる程度のお金と家族と友達があること
普通に暮らせる日常があること
目標や好きなことがあること
自由に生きること
苦勞のない生活
成長を感じられる瞬間
死んでもいいと思える時
欲望が叶う時
満足感が得られる時
やる事がすべて身になる
夢に向かって頑張れる
愛してもらうこと
自然に笑顔のなる時
他人と支え合えること
美味しいものを食べた時

(表9) 生きる苦しみとは

生きる苦しみ
悪口やいじめを見ること
生きる目標がない時
やりたいことができない時
誰かが犠牲になる時
精神が休めない時
努力が報われない時
不自由な生活になること
死への恐怖
前が見えない時
1人でもがんばらねばいけない時
ストレスを感じる時
誰もいない時
何もかも手からなくなること
大きな壁がある時
理想と現実のギャップが大きすぎる時
幸せでない時
葛藤している時
人間関係で悩む時
思い道理にならない時
悩みが絶えない時

(表10) 嬉しい言葉

嬉しい言葉
あなたならできる
頑張ったね
笑顔がいいね
努力家ね
あなたがいてくれてよかった
そのままでもいいんだよ
気遣いができるね
性格が良いね
優しいね
自分を持っているね
何でもこなすね
成長していくあなたを見るのが楽しみ
一緒にいると楽しい
ありがとう
よくできたね
才能があるね
良い先生になれそう
演奏がかっこいい
声がきれいだね
音を褒められた

(7) アクティブ・ラーニングの授業について

⑱「人前で発表したり、グループで討議することは好きですか」について質問したところ、四月より七月の最終授業の時点では、「好き」「少し好き」が7人から18人に増加した。「とても大切」「少し大切」が55人から60人に増加した。

⑲「人前で発表したり、グループで討議することに自信ができましたか」について質問したところ、「前より自信ついた」「少し自信ついた」が18人であった。

⑳「アクティブ・ラーニングの授業が今後あったら参加しますか」について質問したところ、「今後積極的に参加」「今後参加」が53人であった。

(表11) アクティブ・ラーニングの授業

		ピアノ	演奏家	管楽	弦楽	打楽	作曲	ジャズ	映像音楽	音楽療法	音楽総合	音楽ビジネス	計
	計	14	6	24	2	6	1	1	1	3	6	1	65
人前で発表する4月	好き		1				1						2
	少し好き	1	1	1	1						1		5
	変わらない	7	4	9		4		1		2	1		28
	嫌い	6		14	1	2			1	1	4	1	16
人前で発表する4月	とても大切	4	1	5	1	2	1		1		2	1	18
	少し大切	8	4	13	1	4		1		3	3		37
	思わない	2	1	4							1		8
人前で発表する7月	前より好き	1		4						1	1	1	8
	前より少し好き	5		3						1	1		10
	変わらない	8	6	17	2	6	1	1		1	4		46
	嫌い								1				1
人前で発表する7月	とても大切	3		6		2		1		1	1	1	15
	少し大切	10	6	16	1	4	1			2	5		45
	思わない	1		2	1				1				5
人前で発表する7月	前より自信ついた	1		4						1	1	1	8
	少し自信ついた	5		3						1	1		10
	変わらない	8	6	17	2	6	1	1	1	1	4		48
アクティブ・ラーニング	今後積極的に参加	2		6				1			2	1	12
	今後参加	7	5	15		6	1		1	3	3		41
	今後参加しない	5	1	3	2						1		12

5. 今後の授業に向けて

音楽大学の学生であるため、楽器などのつについては得意であるが、教壇やグループでの討議は苦手な学生が多かった。四月での最初の夢の発表では質問紙に書いた内容だけの発表で30秒にも満たない学生が多かった。しかし、毎回の授業後の質問紙にも○や選択だけでなく、自由記述にも積極的に取り組むように変化していった。考える力、まとめる力、書く力、発表する力が徐々に備わったといえる。グループ討議では、子どもの登校拒否・虐待・いじめの討議では経験もある学生もあり討議に熱が入った。克服してきたことを発表する

ことでさらに生きる力となった。新聞を利用するグループ討議では、世界や日本の政治・経済に触れることにより、社会に出てからの知識や能力を養った。これらのアクティブ・ラーニングの導入により、自信がついた学生も多かったことから、さらに実際の高等学校や中学校の音楽の授業を参観し、グループ討議をさらに進めたいと考える。教育実習までに学生の意識を高めることが理想とする教師像に近づき、社会で必要とされる人物になると考える。



グループで討議中の学生（撮影許可）

参考文献

- (1) 今井康好・森安史彦・村松敦他「教職論におけるアクティブ・ランニングに関する研究 — 国立教員養成系大学・学部のシラバスの分析を通して —」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』第166号（2017年）117～126頁
- (2) 滝川淳・古山典子「質問紙調査を通して見る大学生の音楽教育観ならびに音楽教師像」『熊本大学教育学部紀要』第65号（2016年）155～161頁
國原幸一郎「教職論における受講生の教師像と虚飾観」『名古屋学院大学教職センター年報』創刊号（2017年）33～46頁
- (3) 古山典子・滝川淳「アンケート調査から見る音楽教師の音楽指導観」『福山市立大学教育学部研究紀要』第5巻（2017年）25～33頁
- (4) 後藤康志・宮衛衛・澤邊潤他「授業リフレクションにおける教職課程カリキュラムの改善」『新潟大学高等教育研究』第2巻（2015年）9～16頁
- (5) 渡邊巧「初期生活科における教師教育論の展開と特質 — 教科の本質を共有するための取り組み —」『初等教育カリキュラム研究』第5巻（2017年）19～29頁